

IN THIS ISSUE:

Hot Issue

東南アジアにおける イスラムの変化を追う

グローバル化の波にさらされている東南アジアのイスラムについて話し合うシンポジウムが、昨年11月にシンガポールで行われました。同シンポジウムでは、グローバル化による、東南アジアにおけるイスラムの社会的立場の変化などをテーマに議論しました。大岩隆明上席研究員に詳しく聞きます。

[READ MORE](#)



イスラム教徒の礼拝風景＝インドネシア 写真：今村健志朗 (JICA)



Reviews

アジア沿岸都市部の気候変動適応策に関する横断的アプローチ

武藤めぐみ研究員は、タイで行われた環境科学の国際会議(ICSS)に出席し、「気候変動がアジアの大都市に与える影響研究」プロジェクトの中間報告を行いました。気候変動によって起きるであろう2050年時の洪水をシミュレーションした研究で、フィリピン・マニラの都市計画の問題点を指摘しました。この提言は、すでにマニラのインフラ整備計画に活用されています。

[READ MORE](#)



Reviews

村人の視点から開発プロジェクトを考える

花谷厚上席研究員は「アフリカの村落給水組織と協調的社会形成に関する研究」プロジェクトに関する調査のため、昨年9月から12月まで、セネガルの村落に滞在しました。村民の家に泊まり込み、彼らと生活を共にしながら、村落給水システム、住民参加型水利用組合の状況や、住民たちの水源選択の現状を調査する中で、課題も見えてきました。

[READ MORE](#)



Reviews

武内・澤田両研究員が学術賞受賞

昨年11月、武内進一上席研究員が、第31回「サントリー学芸賞(「政治・経済部門」)(主催＝財団法人サントリー文化財団)、および第13回「国際開発研究 大来賞」(主催＝財団法人国際開発高等教育機構:FASID)を受賞。澤田康幸客員研究員は、第2回「円城寺次郎記念賞」(主催＝日本経済研究センター:JCER)を受賞しました。

[READ MORE](#)

東南アジアにおけるイスラムの変化を追う

グローバル化は東南アジアのイスラム・ムスリムにも衝撃を与えています。多くのムスリムは大きな利益を生み出すグローバル化を受け入れています。しかし、世俗化に反発する勢力の台頭も見られます。

「グローバル化に伴うイスラムの社会的変化は、同地域の公的・組織や公共政策に直接的な影響を与えている」と語るJICA研究所の大岩隆明上席研究員。同研究員は、こうした変化を知ること、イスラムの特質を考慮に入れた開発のあり方や国際協力に関する政策決定のために、有益な情報を提供することができるのではないかと語ります。



大岩隆明上席研究員

同研究員が関わる「東南アジアにおけるイスラムの位置」研究プロジェクトは、そのような問題意識に基づき、東南アジアのイスラムの特質とその社会において占める役割を分析しようとするものです。本プロジェクトは、JICA研究所と域内の大学・関連機関による共同研究として進められており、イスラム・非イスラムの双方を含む15名の国際的に主導的な研究者の参加のもと、個別的研究成果をシンポジウムで共有しつつ、議論を深めていく形で研究が進んでいます。

昨年11月にシンガポールを訪れた同研究員は、本プロジェクトに係る2回目のシンポジウム（計3回行われる予定）に参加しました。シンポジウムでは、「東南アジアにおけるムスリムの動向」「グローバル化に対するムスリムの対応」「民族国家とムスリムの関係に関する国家間比較」の3つをテーマに議論。反近代化感情やイスラム少数民族問題、紛争と平和構築、イスラム政治における民主化などに関して発表がなされたほか、議論はグローバル化によるイスラム教育への影響や、「ジハード（聖戦）」にも及びました。

一連の議論を通じて、東南アジアにおけるイスラム社会の動きを文化的背景に即して正しく理解するためには、そこでの「近代化」という事象の意味を明確に把握することが必要という認識が共有されました。

同研究員はまた、ムスリム多数国のインドネシアとマレーシア、また少数国のフィリピンとタイにおける、イスラムとグローバル化に関する意識調査を進めています。ムスリムと非ムスリムに対する聞き取り調査を基に、4カ国の各国内比較と、各国間比較を行います。同研究員は、各グループ間（特にイスラム社会がより周縁化した地域とイスラムが主流化した社会）での意識の違いが見られるのではないかとみています。本シンポジウム参加者の研究と併せ、同地域のイスラムのより正確な情報が期待されます。調査は今月から3月まで実施され、2010年度半ばまでには分析結果が出る予定です。

シンポジウム参加者たちの論文は、今年半ばに予定されている3回目のシンポジウムで発表されません。

アジア沿岸都市部の気候変動適応策に関する横断的アプローチ

JICA研究所の武藤めぐみ研究員は、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第4次評価報告書の指摘を踏まえ、アジア沿岸都市部において洪水が及ぼす直接的・間接的影響についての研究を行っています。

本研究プロジェクトでは、気候分析・洪水分析・社会経済分析の手法を組み合わせた定量的シミュレーション分析を行っています。本研究は東京大学・茨城大学・アテネオ・デ・マニラ大学などの学術的な助言を受けた、アジア開発銀行(ADB)・世界銀行との共同研究であり、アジアの大都市が検討すべき適応策について提案を目指すものです。

本研究プロジェクトの特徴は、全地球規模の気温上昇予測を使う代わりに、複数のIPCCモデルを組み合わせ、対象となるアジアの沿岸都市それぞれの場所で予想される2050年時点の気温上昇レベルに局地化したことです。降水量、河川流量、海面上昇および台風起因の高潮を加味して、さまざまな気候シナリオの具体的な洪水予測図を作ります。さらに、地上の洪水制御のためのインフラに関するデータとも組み合わせ、商業用や住宅用建物・道路・車両への損失、また、通勤にかかる時間や収入の損失といった間接的損失についても試算が進められています。現在、同研究員がマニラを対象として研究に取り組んでおり、ADBと世界銀行がそれぞれホーチミンとバンコクを担当しています。そして、これらの都市で2050年に予測される洪水被害の特徴と規模についての比較を行っています。

本研究はまだ途中段階ですが、その成果はすでにマニラのインフラ関連プロジェクトプログラムや、政策提言に用いられています。

同研究員は昨年11月23日から24日にタイで開かれた「アジアにおけるサステナビリティ学(地球持続学、または持続可能学)に関する国際会議」(ICSS-Asia)に参加し、本研究について発表しました。ICSSは持続可能な開発の現状やそのためのアプローチに関する知識を共有するとともに、学術機関と国際援助機関が新しい知識の創造を目的として連携する場となっています。

学者・研究者・政策立案者らを前にした発表において同研究員は、「気候変動はひとつの領域だけの問題ではなく、あらゆる考え方を統合することが重要。それこそが、サステナビリティ学の求めるものだ」と、気候変動による被害や適応策を分析する際の領域横断的アプローチの重要性を強調しました。



武藤めぐみ研究員

JICAとADB、および世界銀行の3共同研究機関は本研究を総括報告書としてまとめ、2010年に発表することを計画しています。現在IPCCでは第5次評価報告書の準備が進められており、同研究員は今後、経済損失の実数値をケーススタディーとして示すことにより貢献することを視野に入れています。

村人の視点から開発プロジェクトを考える

「アフリカの村落給水組織と協調的地域社会形成に関する研究」プロジェクトの代表を務める花谷厚上席研究員は、昨年9月から12月にかけて、セネガル南東部のタンバクンダ州にある4つの村に滞在。村民と生活を共にしながら、村落給水システム（ハンドポンプ式、および動力式管路による深井戸給水システム）の維持・管理状況を調査しました。



共同水栓場（共同栓）で水をくむ人たち
＝タンバクンダ州コアール村

セネガルでは、JICAによる「安全な水とコミュニティ活動支援計画プロジェクト」（現在、フェーズ2が進行中）をはじめ、各ドナーが給水施設の建設や、「参加型深井戸水利用組合」（Association des Usagers des Forages：ASUFOR）の支援を行っています。本研究は、給水システムを「地域共用資源」として捉え、JICAプロジェクトで改善が目指されている同システムの維持管理に与える要因・過程や、それに伴う地域社会の形成について考察するものです。

今回の調査では、地下水の賦存状況や給水システムの運営・管理状況の問題から、依然として不衛生な自宅の浅井戸を使用し続けているケースも

確認されました。こうした、利用者の「水源選択」に影響を与える要因や、管理制度の実態、また、その背景にある村落の社会的・経済的特性について、現在、調査結果の分析を進めています。

Reviews

武内・澤田両研究員が学術賞受賞

昨年11月、JICA研究所の武内進一上席研究員と澤田康幸客員研究員（東京大学大学院准教授）が、外部の文化財団、研究機関から学術賞を受賞しました。

武内上席研究員は、近著『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』（明石書店）により、財団法人サントリー文化財団が、独創的で優れた研究、評論活動を表彰する第31回「サントリー学芸賞（「政治・経済部門）」」、および国際開発の分野での貢献を評価対象とする第13回「国際開発研究 大来賞」（主催＝財団法人国際開発高等教育機構：FASID）を受賞。

澤田客員研究員は、国内外における自然災害が被災者の生活に及ぼす影響や、経済情勢と関連する自殺問題などをテーマに実証研究して幅広い観点から問題提起を行ったことで、若手・中堅エコノミストを対象とした第2回「円城寺次郎記念賞」（主催＝日本経済研究センター：JCER）を受賞しました。

各受賞とも、JICA研究所に所属する研究員の研究の斬新性や普及性が認められたものです。